

44 泌尿器科疾患における尿中CEA様物質測定 の臨床的意義 第一報 腸管利用症例の尿中CEA

九州大学 放射線科

○ 鷲海良彦, 仲山 親, 鴨井逸馬, 一矢有一,
松浦啓一

同 泌尿器科

八木拓朗, 百瀬俊郎

はしがき

泌尿器科領域の悪性腫瘍、とくに膀胱腫瘍などにおける血清CEAについては、すでに進行度・治療効果および予後の判定に有効であることが報告されている。更にまた、膀胱腫瘍は大腸と同じ内胚葉性の臓器から発生した癌であることから、尿中CEA様物質の測定は膀胱癌患者の原発および再発の診断に有効であると報告されている。

今回は、主として代用膀胱および代用尿管つまり腸管利用の手術を受けた症例の尿中CEA様物質の測定を行ない、その臨床的意義を検討したので報告する。

対象と方法

1977年4月以降、九州大学泌尿器科外来および入院患者を対象とした。年齢は4～74才で、男性46例、女性13例の計59例である。このうち腸管利用症例は15例で、膀胱腫瘍に起因するものは7例であった。比較の意味で正常例についても検討したが、検体尿は原則として中間尿にて採尿した。尿は沈渣検鏡し、その上清を凍結保存した。CEA様物質の測定は、ダイナボット研究所によるCEAキットを用いた。

結果

- I) 尿感染例においては、非感染症例よりも高値を示した。
- II) 尿路腫瘍患者では、約60% ($\frac{7}{11}$) にCEAレベルの上昇が認められた。
- III) 腸管利用症例は、いずれとも高い値を示した。

尿路腫瘍における、腸管利用患者の腫瘍再発に対し尿中CEA様物質測定の間から、今後追求していく方針である。

45

泌尿器科疾患における尿中CEAについて 慈恵医大泌尿器科学教室

○ 木戸 晃, 町田豊平, 三木 誠,
大石幸彦, 上田正山, 柳沢宗利

養育院病院核医学放射線部

飯尾正宏, 山田英夫, 末広牧子

緒言：われわれはすでに、各種泌尿器科疾患および消化器系悪性腫瘍の血清CEAに関し報告して来た。今回は各種泌尿器科疾患の尿中CEAをone step sandwich法で測定し、その臨床的意義を検討すると同時に、同時期に採取した血清CEAとも比較検討した。

対象：正常者 20例を含む泌尿器科疾患の63例で、疾患の内訳は膀胱腫瘍19例、前立腺癌4例、腎細胞癌4例、腎盂尿管腫瘍3例、睪丸腫瘍3例、尿路感染症10例である。

検討方法：まず尿中CEAについて特定の泌尿器科疾患との関連を検討した。ついで尿路感染の有無による尿中及び血清CEA値の変動を検討した。

結果：1. 正常者の尿中および血清CEAの $\bar{x} \pm SD$ 値はそれぞれ $1.50 \pm 0.90 \text{ ng/ml}$, $1.58 \pm 0.69 \text{ ng/ml}$ であった。疾患別尿中CEAの $\bar{x} \pm SD$ 値は膀胱腫瘍 $5.77 \pm 4.35 \text{ ng/ml}$ 、前立腺癌 $3.96 \pm 4.97 \text{ ng/ml}$ 、腎細胞癌 $2.64 \pm 1.83 \text{ ng/ml}$ 、腎盂尿管腫瘍 $3.62 \pm 0.92 \text{ ng/ml}$ 、睪丸腫瘍 $1.40 \pm 0.22 \text{ ng/ml}$ 以下とすると、膀胱腫瘍では高値を示す症例が多かった。また正常者の尿中CEAの平均値感染症の尿中CEAの平均値の間には0.1%以下の危険率で有意の差を認めた。

2. 尿中CEA値が高値を示した膀胱腫瘍例中、尿路感染のある例を除外した非感染群の膀胱腫瘍の尿中CEAの $\bar{x} \pm SD$ 値は $3.25 \pm 3.20 \text{ ng/ml}$ であり正常尿との間には2%以下の危険率で有意の差を認めた。

3. 血清CEAについても、尿と同様に正常者と尿路感染症の血清CEAの平均値との間に2%以下の危険率で有意の差を認め、血清CEA値と同様に尿路感染に影響を受ける事が示唆された。

結語：1. 尿中CEAは膀胱腫瘍で高値を示す傾向にある。

2. 血清CEA値も尿中CEA値と同様に感染による影響を受けやすい。

3. 尿中CEA値を論ずる場合には常に感染の有無を考慮しなければならない。